

Title	慶應義塾大学独文学研究室『研究年報』掲載論文目録(創刊号～第19号)
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.20 (2003. 3) ,p.380- 385
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20030331-0380

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学独文学研究室『研究年報』掲載論文目録（創刊号～第19号）

執筆者名	論文題名	号数
秋田 静男	『新詩集』にあらわれたリルケにおける 「死」の様相について(1)	5
	『新詩集』にあらわれたリルケにおける 「死」の様相について(2)	6
	『新詩集』にあらわれたリルケにおける 「死」の様相について(3)	7
阿部 雄一	『アンフィトリオン』 ——クライストの演劇性に関する考察——	2
	改作台本作者としてのポート・シュトラウス C. D. グラッペ『ハンニバル』 ——悲劇と「歴史の精神」の間——	5
	Die Struktur des Faschismus in Heiner Müllers »Schlacht«	7
	Die Problematik der jüdischen Identität von Hermann Schiff und Karl Emil Franzos	11
新井 陽一 池永麻美子	Die Judenemanzipation und der Optimismus von Leopold Kompert und Eduard Kulke	16
	Die „Heine-Kritik“ von Hermann Schiff	17
	Die „Heine-Kritik“ von Hermann Schiff	19
石原あえか	聖と俗 ——『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の 時間と空間(その1)——	12
	無常の中の永遠 ——『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の 時間と空間(その2)——	13
	Wilhelm von Humboldt als Goethes junger Briefpartner — Der frühe Briefwechsel zwischen Goethe und Wilhelm von Humboldt (1795-ca. 1800)	14
	Verbalpräfix 'er-' in semantischer, morphologischer und syntaktischer Hinsicht	14
泉谷佳奈子	現代ドイツ語における名詞の属格語尾について ——語尾 -s と -es の使い分けに関する傾向——	2
	『トリスタンとイゾルデ』の素材について ——オリエント起源説をめぐる ein Forschungsbericht——	12
板倉 歌	売買の場面における言語行動 ——ドイツの商店における前哨的調査——	14
	指示代名詞 der, die の名詞的用法について ——人を指す場合の口語性とテキスト類との関連性、	15
伊藤みどり		

	及び諸機能——	9
	現代ドイツ語の過去形と現在完了形に関する 語彙レベルからの一考察 ——特に過去形の出現優位性について——	12
岩崎英二郎	vielleicht をめぐって	19
海老坂 高	『神話の近代的使用について』 ——初期ヘルダーにおける神話と文学——	4
太田 達也	「様式の文学」としての叙事詩 ——詩学の歴史における Chr. M. ヴィーラントの 詩的創造の意義——	10
	Darstellung der existentiellen Verwandlung bei Hofmannstahls Werken — Die Marschallin im „Rosenkavalier“ und die Kaiserin in der „Frau ohne Schatten“ —	11
	Wirklichkeit als Mythos — Gerhart Hauptmanns Glashüttenmärchen <i>Und Pippa tanzt!</i> —	14
大谷 美奈	『アブ・テルファン』における時代批判	4
	『ふくろうの聖霊降臨祭』における二元的世界	6
大塚 直	B. シュトラウスと Fr. ヘルダーリン ——„Diese Erinnerung...“ をめぐって——	15
	ボートー・シュトラウスの戯曲『イタカ』における 暴力の使用について	16
	Über das Maximum und seine zwei Richtungen — Ein kleiner Beitrag zur Natur bei Schiller, Herder und Hölderlin —	17
	Nemesis-Begriff und Schicksalslied — Zu Kraft, Macht und Gewalt in der anthropologischen Systemtheorie im Zeitalter Hölderlins —	18
	変貌してゆくメディア時代の作家 ボートー・シュトラウスの誕生 ——幻のデビュー作『射撃の名誉』を中心に——	19
大淵 知直	^{けんによ} 賢女と妖精、そして魔女 ——グリム・メルヘンの書き換え——	12
	グリム・メルヘンの „Wald“ ——修飾語と副詞に見られる „Wald“ 像	13
加藤 健二	Zur Bedeutung der Tugend bei der Hetäre Danae — „Geschichte des Agathon“ —	8
	Wielands Perspektive — Leserfiguren in seinen Romanen —	9
川島建太郎	Walter Benjamins Erinnerung im Zeitalter der Fotografie 複製技術時代の記憶像	17

	——プーレストにおける写真メタファーの、 ベンヤミンによる受容について——	19
糸川麻里生	サッカー文学の方法 ——ロア・ヴォルフの言語ゲーム——	11
	Auszug aus der versprachlichten Welt — Helmut Heißenbüttel und die Konkrete Poesie —	12
	Die Aufgabe der Übersetzerin? — Zum Problem der Weiblichkeit in der Benjaminschen Sprachphilosophie —	13
櫻井 千絵	ラインハルトと日本演劇 ヴィルヘルム・フォークトのユーモア ——ツックマイヤー『ケーペニックの大尉』——	14 15
佐藤 茂樹	「永遠に女性的なるもの」とグリルパルツァー ——現象の基底としての女性原理をめぐって—— 言語と行為 ——フリードリヒ・デュレンマットの 『物理学者たち』から——	創 2
真田 収一郎	知性への疑い ——母なるものの発見——	5
七字 眞明	『電気石』論(1) ——閉鎖空間の機能をめぐって—— 『電気石』論(2) ——継続なき世界—— „Frühlings Erwachen“ (1) — Formanalytisch betrachtet — „Der fromme Spruch“ — Form und Humor in der späten Erzählung Adalbert Stifters —	2 2 6 7 8
清水 薫	「書かないことの不可能」 ——カフカと初期の作品について—— カフカの小説『審判』における逮捕の意味について ——「門番物語」と関連して——	3 6
進藤 英樹	ベーメのアンドロギュノス説 パーダーの『熱素論』覚書	創 4
進藤 美智	1800年前後におけるベルリンの「文学サロン」について	2
杉村 涼子	Lessings „Nathan der Weise“ — als Antwort auf Goetzes Fragen“ 『ヴェネツィアに死す』 ——主人公アッシェンバハの必然的自己崩壊の過程(1)—— 『ヴェネツィアに死す』 ——主人公アッシェンバハの必然的自己崩壊の過程(2)——	創 3 4

関口 裕昭	Begegnung mit sich selbst — Interpretationen zur Lyrik Paul Celans — (I)	9
	Begegnung mit sich selbst — Interpretationen zur Lyrik Paul Celans — (II)	10
	ツェラーンとハイデガー ——詩作と思索のあいだで——	12
	ボブロフスキーとサルマチアの自然 ——「鳥たちのいる風景」を中心に——	14
高橋 秀誠	「聖なる名の欠如」と「自然」 ——後期ヘルダーリンにおける詩人の使命の省察——	2
高橋 美雪	ホーフマンスタール初期詩劇の詩行形式に関する考察	4
滝藤 早苗	芸術リート <small>の</small> 誕生 ——リート作曲家としてのシューベルト——	15
	ゲーテの音楽思想 ——E. T. A. ホフマンの音楽観との比較の試み——	19
田中真奈美	昏い炎 ——アイヒェンドルフの小説における デモーニッシュなものの流れ—— (1)	8
	昏い炎 ——アイヒェンドルフの小説における デモーニッシュなものの流れ—— (2)	9
	神々の封印 ——アイヒェンドルフと異教——	11
	1848年のメルヘン ——アイヒェンドルフの『リベルタスとその解放者たち』——	14
	神の寵児とイロニーの視線 ——メタ・ロマンンとしての『のらくら者』——	18
津崎 正行	ゲーアハルト・ハウプトマンのドラマ『ヴィッテンベルクの ハムレット』について	17
辻本 勝好	ニーチェにおける沈黙と笑い ——『ツァラトゥストラ』を中心に——	6
中島耕太郎	現代ドイツ語における „machen + akkusativ + infinitiv“ 形式の 動詞結合による惹起的表現の可能性と存在意義	創
中村 元	ノヴァーリスの「キリスト教」 ——「仲介者」のイデーをめぐる——	創
中村 仁	証言としてのホロコースト文学 ナチ強制収容所で生まれた詩について (1)	13 14
新倉 重美	『歓喜に寄す』をめぐる (1) ——「愛」と「 ^{リベ} 歓喜」——	5

	シラーの「詩的悲劇」	
	——当時の舞台芸術が置かれていた状況との関連で——	8
新田 誠吾	カフカの『国道の子どもたち』	
	——その作品理解の過程——	3
	Durch Abbruch bauen	
	— Untersuchungen zu Kafkas Roman ‚Das Schloß‘ —	5
	自己否定の快樂	
	——カフカの『判決』と「書く行為」——	8
野口 方子	『影のない女』	14
	歪められた『アラベラ』	
	——ホーフマンスタールの白鳥の歌は聞き届けられたか——	17
浜田 真	ヘルダーにおける神話の問題	6
	ヘルダーの「精神の内なる物理学」としての人間学	
	——『人間の魂における認識と感受について』を中心に——	7
	Herders Rezeption von Lessings Idee der Vernunft	
	— Lessings »Ernst und Falk. Gespräche für Freimäurer« und	
	Herders 26. Brief der »Briefe zu Beförderung der Humanität« —	9
	Der Grundgedanke von Herders Ästhetik in seiner Schrift „Kalligone“	
	— Eine Kritik an Kants Begriff der „Schönheit“ und „Erhabenheit“	
	in der „Kritik der Urteilskraft“ —	10
	Das Polaritäts- und Morphologiedenken in Herders	
	Geschichtsphilosophie	11
平田栄一郎	Die TEXT-MASCHINE	
	— Zur Rhetorik in der „Hamletmaschine“ von Heiner Müller —	12
	„Ein gutes Gleichnis erfrischt den Verstand“	
	— Wittgenstein und die Rhetorik —	13
深沢 恒男	トーマス・マンの『魔の山』にみるアイロニカルな語り姿勢	4
北條 彰宏	Die Nachfeldstellung in der geschriebenen deutschen Sprache (I)	
	— Nachfeldelemente und ihre Stellungsregeln —	6
	Die Nachfeldstellung in der geschriebenen deutschen Sprache (II)	
	— Die Nachfeldstellung als ein neutrales Stellungsmuster —	7
細井 直子	Mädchenbilder in der „Deutschen Mädchen-Zeitung“ (1.1869-73.1941)	19
堀江 仁美	hôchmuot と höher muot について	12
峯岸 祐子	トーマス・マン『トリスタン』試論	
	——もう一つの源泉としての『ワルキューレ』——	16
宮川 尚理	『公園にて』	
	——ペーター・アルテンベルクにおける無限——	3
	「祝福」	
	——ゲオルゲの『悪の華』(1)——	5

宮下 啓三	ゲルステンベルクの悲劇『ウゴリーノ』 ——18世紀ドイツの戯曲史と演劇史のはざまに 位置する作品——	19
三輪 玲子	現代喜劇世界の一考察 ——ホルヴァート『フィガロの離婚』をめぐって——	7
村井 翔	『早春』 ——ホフマンスタールの魔術的地理学(1)——	創
	『旅の歌』 ——ホフマンスタールの魔術的地理学(2)——	2
	『ふたり』 ——ホフマンスタールの魔術的地理学(3)——	3
	『体験』 ——ホフマンスタールの魔術的地理学(4)——	4
	『生の歌』 ——ホフマンスタールの魔術的地理学(5)——	5
毛利 真実	『夏の夜の夢』から『夏の夜』へ ——ティークの描く妖精の世界——	18
森澤万里子	攻撃対象への方向を表す an についての覚え書き若干 ——初期新高ドイツ語における前置詞 an の一用法——	8
	初期新高ドイツ語における前置詞 gegen と wider の用法 ——今日のドイツ語における両前置詞の関係との 意味論的比較を中心に——	10
山口 祐子	Wer ist der Mann mit 5PS? — Kurt Tucholsky und seine 5 Pseudonyme —	18
横井 展	『習作集』におけるシュティフターの実験的自然描写について 物語世界からの失踪 ——詩的リアリズムの小説における閉鎖性と 省筆の技法について——(その1)	6 12
横山 由広	Zu den konkurrierenden Verwendungen der mittelhochdeutschen Präpositionen „vor“ und „für“ — Versuch einer Korpusanalyse —	7
吉田 真	再現芸術における受容構造 ——リヒャルト・ヴァーグナー研究のための試論——	5
渡邊 徳明	英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』研究の歴史と動向 ——テキストの成立と伝承における創作意志をめぐって——	16

(日本語題名のものは本文も日本語、題名がドイツ語のものは独文による論文であることを示す。)